静岡社会健康医学大学院大学
Shizuoka Graduate University of Public Health
京都大学
KYOTO UNIVERSITY

配布先：静岡県政記者クラブ、京都大学記者クラブ、文部科学記者会、科学記者会
報道解禁：なし

2024 年 9 月 26 日

介護者の食事行動への罪悪感と介護重責感

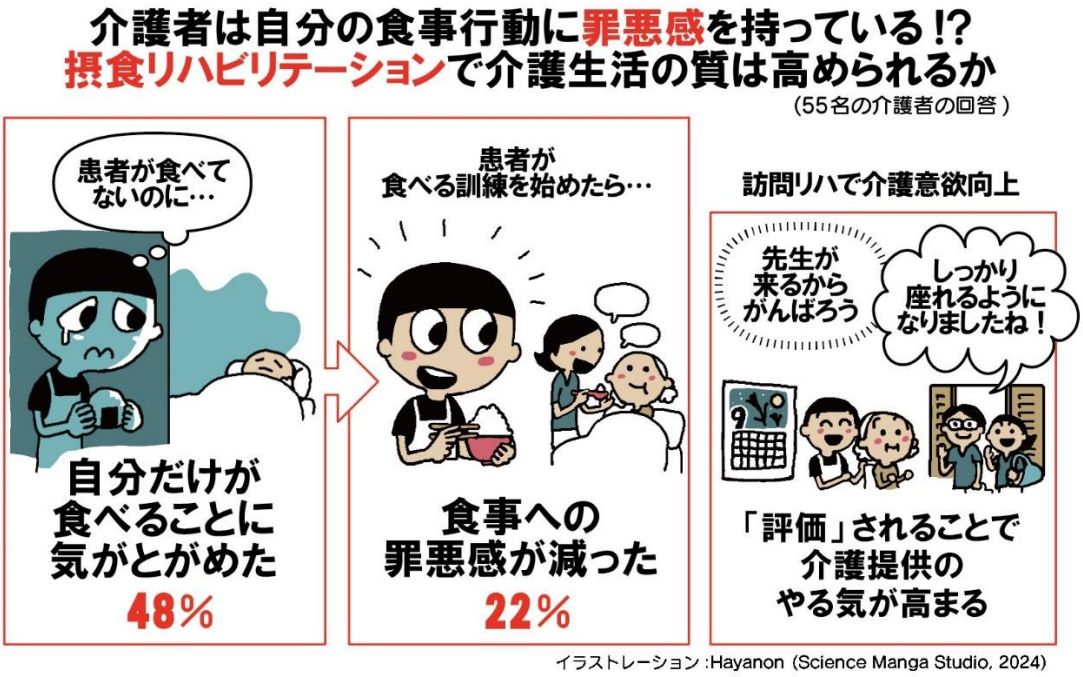
―重度嚥下障害者の継続的経口摂取訓練の影響―

概要

経管栄養の普及もあり、十分に口から食べられないまま在宅で暮らす方が増えています。毎日の食事ケアをする介護者は重責感も強く、さらに自らの食事に罪悪感を持ち立ったまま簡便に済ませる人もいますが、このような介護者の姿はあまり知られていません。口から食べられるよう支援する摂食嚥下リハビリテーション(摂食リハ）は、介護者にも良い影響があるのではと考えました。

京都大学大学院医学研究科健康情報学 中山健夫教授と静岡社会健康医学大学院大学 森寛子准教授らの研究グループは、罪悪感を持つ介護者割合、摂食リハと介護重責感の関係、介護のやる気への影響を介護者に質問調査しました(2009 年 8 月～2021 年 1 月)。100 人中 55 名の介護者から回答を得た結果、介護者の 48%は患者がもっとも食べられなかった時に罪悪感を持っていましたが、摂食リハを始めると罪悪感を持つ介護者は 22%に減りました。患者の 8 割以上がほぼ全介護でしたが、患者の座位時間を増やすように努めるなど、介護全体へのやる気を高める介護者が 80%いました。けれども、患者の食べ方回復は介護のやる気と関連は見られませんでした。この研究は介護者の自己報告なので、今後、前向きな追跡調査など科学的検証が必要です。

本研究は、2024 年 8 月 22 日に、アメリカの国際学術誌「*Journal of Parenteral and Enteral Nutrition*」にオンライン掲載されました。



イラストレーション :Hayanon（Science Manga Studio, 2024）

＜研究プロジェクトについて＞

予算

日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(C)：17K09221

摂食・嚥下リハビリテーションの経口摂取改善要因と介護者の心理的支援に関する研究

関連研究機関

京都大学 東京医科歯科大学 口腔リハビリテーション多摩クリニック

＜研究者のコメント＞

「本研究は、経管栄養者の介護者へのグループインタビューが発端です（Nutrition in Clinical Practice 34(2) 2019)。熱心なケア提供ゆえに、社会との隔絶感や自分の食事へ罪悪感を持つ介護者の気持ちを知りました。コロナ禍で摂食リハ訪問が中断された中、量的研究による知見がまとまりました。地道なケア提供を医療者が認めたり、経管栄養でもわずかに口から食べられることが介護者の心理的支援になるなど、経口回復以外の摂食リハの良い影響を伝えられればと思います。」（森寛子）

＜論文タイトルと著者＞

タイトル：Caregiver burden and eating - related guilt during dysphagia rehabilitation: A descriptive cross - sectional time series study

著　　者：Hiroko Mori, Ayako Nakane ,Yuri Yokota, Haruka Tohara, Takeo Nakayama

掲 載 誌：*Journal of Parenteral and Enteral Nutrition*　DOI：10.1002/jpen.2679

＜研究に関するお問い合わせ先＞

森　寛子（もり　ひろこ）

静岡健康医学大学院大学 准教授、京都大学大学院医学研究科 健康情報学 客員研究員

TEL：090-4538-4841

E-mail：hmori@s-sph.ac.jp

＜報道に関するお問い合わせ先＞

京都大学 渉外・産官学連携部広報課国際広報室

TEL：075-753-5729　FAX：075-753-2094

E-mail：comms@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

静岡社会健康医学大学院大学教務課 研究支援室

TEL：054-295-5401

E-mail：kenkyu@s-sph.ac.jp